学校教育実践学研究，2018，第 24 巻，175 − 185 頁

体育授業は学級経営にどのような影響を及ぼすのか
：初任の小学校教員を事例として

岩田昌太郎・中山泉*・川口諒**・正木志歩***・有馬尊***・
濱本想子***・則清陽香***・中川昂***・室本佳祐***・佐藤由惟****

（2017 年 12 月 21 日受理）

What Impact does Physical Education have on Classroom Management?
：Focus on a case of a novice teacher in a primary school

Shotaro Iwata, Izumi Nakayama, Ryo Kawaguchi, Shiho Masaki, Takeru Arima,
Aiko Hamamoto, Haruka Norikiyo, Koh Nakagawa, Keisuke Muromoto and Yui Sato

This article aims to address the relationship between physical education and classroom managemen of a novice teacher in a primary school. In conclusion, the things of this case study were as follows: (1) As a feature of the novice teacher A, the scores in "Attitude" dimension of physical education class evaluation was high, then learning discipline was retained. However, the scores in "Human Relationship" dimension of class consciousness showed low value, and it turned out that the novice teacher A was suffering from constructing good human relations within the class. (2) From the result of correlation between physical education class evaluation and classroom manegement, there was no strong relationship between physical education and classroom management of the novice teacher A. As a factor, from the interview of the novice teacher A, it was suggested that the image of classroom manegement the novice teacher A intended was not clear.
Key words : physical education, classroom management, novice teacher, primary school

1. はじめに

1.1. 初任教員の取り巻く教育環境

周知の通り，日本ではこの数年間で教員全体の 34％である 20 万人弱が退職し，経験の浅い教員が大量に誕生し，先輩教員から新人教員へと知識・技能の伝承が困難となることが懸念されている（中央教育審議会，2010，2017）。しかしその一方で，激変する教育現場において，複雑かつ多様な課題の山積に苦悩し，精神疾患により病気休職者数（平成 27 年度に推定 5,009 名）が後を絶たない（文部科学省，2010）。そのような課題や実態が浮き彫りになっている今，学校や教員たちに何が起きているのであろうか。

折しも，国外にも目を向けてみれば，一部の国（アメリカ，イギリス，オーストラリア）においても同様に教員の離職率が問題視されている。しかも，教員キャリアの最初の 5 年間で約 40-50％の教員がその間に離職しているという報告もある（Gallant *et al.*, 2014）。それは日本でも類似した傾向を示しており，採用されてから 1 年以内に離職した全国の公立学校の初任教員が年々増加傾向にある（文部科学省，2010）。すなわち，初任教員は，夢や希望を胸に学校現場に初めて飛び込むとき，「やりがい」を感じる者もいれば，その反面，理想と現実のギャップ，いわゆる「リアリティ・ショック（reality shock）」（Marso & Pigge, 1987 ; Odell, 1986）に直面し苦悩する傾向にある（岩田，2014）。

それでは，初任教員たちは一体どのような悩み

* 石川県金城学園遊学館高等学校
** 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
*** 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
**** 兵庫県立高等学校 非常勤講師

や課題を抱いているのであろうか。

第 1 に，初任時の教員が感じた困難について，最も困難度が高い項目は「授業」であり，次いで「学級経営」と「初任者研修」，「軽度の発達障害が疑われる児童への対応」という点である（高平ら，2014）。すなわち，初任教員にとって，授業づくりを基軸として，学級経営や研修などに多くの悩みを抱ている状況が垣間見ることができる。

第 2 に，そのような悩みの中でも，日本の小学校教員の特徴となる学級担任制，つまり学級経営が大きな課題となることである。学級経営を進めるにあたり，児童生徒が指示に従わない，特別な教育的支援を必要とする児童生徒の増加，そして複雑かつ多様な保護者へ対応などの課題が挙げられよう（安藤，2013）。また，学級経営につまずく教員やその環境の特徴として，高学年を担任することや，初任教員・女性教員ほど生徒指導上の問題に苦慮しやすいなどの特徴も報告されている（安藤，2013）。しかしながら，教員採用以前に学級経営について実経験的に学ぶ機会が少ないことも事実である。しかも，中田（2009）は，教員に必要とされる教材研究や学級経営を含む資質能力は，経験的に理解されている現状があり，経験の乏しい初任教員は，多くのことを身に付けなければならないと考えており，それが不安感につながっていると指摘している。すなわち，初任教員にとって，毎日の学級経営の基盤づくりがあって，初めて各教科の授業が成立することになるため，その両者の悩みや課題について支援することが求められよう。

1.2. 初任教員における「学級づくり」と「授業づくり」

学級経営には，指導力など教員の特性に加え，児童の能力や性格などの児童の特性，保護者や地域の考え方，さらに学校の指導方針や指導体制など，様々な要因が関わっており，教師はそれらの要因を大局的に判断し，学級経営に当たる必要がある（学校教育研究所，2004）。一方，小学校において，授業が成立しない，学級の秩序が乱れるなどのいわゆる「学級崩壊」の現象が，1990 年代以降に顕在化し，教員の学級経営のあり方が問われている。

本来，学級経営を運用していく上で，「最も重要なことは学級の児童一人一人の実態を把握すること，すなわち確かな児童理解」（文部科学省，2008）にある。また，学級経営と生徒指導を充実することについて，「日ごろから学級経営の充実を図り，教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め，生徒指導の充実を図ること」（文部科学省，2008）にもつながる。すなわち，児童がそれぞれに保持する異なる能力や興味・関心等を見極め，学級担任の教員としての日ごろのきめ細かい観察や，児童との対話を通して一人一人の児童を客観的かつ総合的に認識することが必要である。

では，小学校教員における効果的な学級経営とはどのようなものか。土田（2015）によると，学級経営では，児童の意欲化や実践化につながるような教員の意図的で継続的な働きかけと，安心感を育むような規律や受容の態度を集団の中に構築させることで，豊かな人間関係が確立されることを指摘している。また，これまででは通例であった教員の介入が多い管理的アプローチでは，かえって児童生徒の抵抗や反感を生むとし，教員の介入が少ない管理的アプローチの方が教員と児童生徒のモチベーションも上がり，学習成果も上がると述べている（Lewis，2001）。

一方，「初任期」の中でも 1 年目は，特に「授業づくり」という問題に悩む時期である（木原，2004）。その中でも，小学校教員が教科体育の指導に対して否定的見解を持つものが多いことも明らかになっている（秦泉寺ら，1993）。秦泉寺ら（1993）は，小学校教員を対象に行った調査において，教員自身が学生時代（小学校～大学）に「体育の授業が嫌いだった」，また「課外で自由にスポーツができるなら体育は教科に加えなくてもよい」などの教科体育について否定的見解を持っている教員の割合が予想以上に高いことを明らかにしている。したがって，初任教員の授業づくりの中でも，体育授業の指導に関しては特に苦悩することが予想できる。

さらに加登本ら（2010）は，小学校教教員は体育授業を行う上でどのような事項に悩みを感じているかについて調査を行った。その結果，授業での適切な学習規律の維持や子ども相互の協力的な関係づくり，また安全を確保したり，意欲を喚起しながら指導することなどに関する悩みは相対的に低い傾向にあった。しかしながら，配慮を要する子どものニーズに応えることや一人一人の子どもの学びを把握するといった個別指導に関する課題とともに，自分が模範を示せない種目の指導や子どもに合わせた教材づくりなどの課題に関する悩みが高いことも明らかにしている。

ところで，巷の教育関連の啓蒙誌を読む中で，「体育が楽しければ学級経営はうまくいく」や「体育授業を観れば，日頃の学級経営の状況が分かる」といったフレーズを目にすることがある（e.g.，日野，2000；向山，2015）。しかも，現在まで，多くの実践家や研究者たちによって，経験的かつ実証的にも体育学習と学級集団との密接な関係について叙述されてきた経緯もある（高橋，1996；歌川，1998；八代，1998；日野ら，2000；細越・鋤柄，2002）。

例えば，日野ら（2000）の研究においては，単元前後の体育授業と学級経営に関する意識との関係と変化を49学級1508人の児童を対象に調査しているが，具体的な事実関係については明らかにされていない。また，担任をしている教員の教職キャリアについても言及はされていない。さらに，細越（2004）は，体育の学習指導と学級経営の教員の力量に着目して，体育授業をもとに学級経営を行ってきたベテラン教員（教職経験15年以上）が担当する学級の体育授業と学級経営の関係性についての報告している。

したがって，教科体育の存在意義としての基盤強化や教科特性を強調する意味において，そのような関係性の事実が明らかになれば，学校教育における体育授業の意義は大きい（日野ら，2000）。しかし，果たして，すべての校種や教職歴でそのような関係性が成り立つのであろうか。

2. 研究の目的

2.1. 問題の所在

以上のように，現在，初任教員の学校現場で置かれている現況から，さらに学級経営や授業づくり，とりわけ体育授業の実施に苦悩していることを述べてきた。また，効果的な学級経営を基盤として，良好な人間関係を築くことができれば，すべての教科指導や人間関係の形成に寄与する体育授業（友添，2009）の充実にも貢献できることが可能となる。

しかしながら，日野ら（2000）や細越（2004）の先行研究においても，教職歴を加味した体育授業と学級経営の関係性については明らかにされていない。しかも，細越（2004）の報告ではプラスの相関を得られたのは，15年以上という教職経験年数に限定されたものとなっている。

2.2. 研究の目的

そこで本研究の目的は，初任の小学校教員における体育授業と学級経営の関係性について，事例的に明らかにすることである。具体的には，以下の研究課題を設定している。

（1）初任の小学校教員が担当している学級の児童の体育授業と学級集団意識の関係性について，その実態と年間の変容を調査する。

（2）初任の小学校教員の立場から体育授業と学級経営の関係性を明らかにする。

3. 理論的枠組み

本研究において，学級経営と体育授業の関係性を紐解くために，まず学級経営についての概念整理をする必要があると思われる。白松（2014）は，日本の特色に着目して「学級経営」概念の整理を行っている。以下，白松（2014）を参考にして整理する。

白松（2014）は，「学級」の捉え方について，①組織管理上の単位，②学習の単位，③生活の単位とする立場の3つの捉え方があるとしている。その中でも，特に「③生活の単位とする立場」が日本における集団主義教育の中で強調されてきたと指摘している。さらに「学級経営」の概念を，「条件整備」型学級経営観と「学級づくり」型学級経営観の2つに大別している。

第1に，「条件整備」型学級経営観について概説する。もともと欧米では，授業を効率的に運営するための条件整備としての学級経営（Classroom Management）の考え方があった（白松，2014）。欧米における学級経営に関する研究は，1900年代初めにBagleyによって始められた。Bagley（1907）は，学級経営の目的を授業の秩序の維持による授業効率の向上と設定した。また，1900年代では，教員や生徒の行動をルーティン化し，授業効率を上げることが重視された。1970年に入ると，モデリング理論（Bandura，1969）が採用され，学級経営研究も大きな転換期を迎えた（Brophy，2006）。そこでは，教員と生徒の良好な関係性の構築が重視され，罰や叱責ではなく，両者の信頼関係によって問題行動を制止する対応が求められるようになった。さらに2000年代では，子どもも学級経営に参与するインクルーシブな学級経営も求められるようになった（Sellman，2009；Montuoro & Lewis，2015）。

このように学級経営に関する研究の蓄積の中で，欧米における学級経営についての考え方が変遷していったことが分かる。しかしながら，欧米では教員の仕事は授業が中心であり，これらの学

級経営についての考え方の主眼は，授業のための条件整備にある（白松，2014）。

第 2 に，「学級づくり」型学級経営について概説する。「学級づくり」型学級経営の概念は「条件整備」型学級経営よりも広範な領域を含む（白松，2014）。白松（2014）は，その背景に日本の教育課程の特色として全人教育を目指していることを指摘している。そして，白松（2014）は，「学級づくり」型学級経営を 3 つの領域から構成される概念として提案している。この 3 つの領域とは，必然的領域（領域 1），「条件整備」型学級経営領域（領域 2），「学級づくり」型学級経営領域（領域 3）であり（詳細は表 1 を参照），これらは階層的な関係性を持っている。「学級づくり」型学級経営を行おうとする場合，「条件整備」型学級経営を抜きに実践するといわゆる「学級崩壊」の状態に陥りやすいことが問題とされているため，領域 1 及び領域 2 において必然的・計画的な指導が必要な領域が示されている。そのような基盤があるからこそ，「生きる力」の育成を目指すような学級経営が可能であると考えられる。

以上をまとめると，「学級」を生活の単位として捉える日本の文脈の中で，日本における学級経営は単に学習環境を整備するような狭義の学級経営ではなく，学校教育における教育活動すべてを包括するような広義の学級経営として考えることができるだろう。そのように考えれば，学級経営と体育授業の関係性は，欧米のような体育授業を成立させるための学級経営という関係ではなく，学校教育の教育目標を達成することが学級経営の目標であるとするならば，そのための 1 つのツールとして体育授業が存在するというような関係が成り立つと仮定される。

したがって，本研究では，図 1 のような理論的枠組みを基盤として，2 つのアプローチから学級経営と体育授業の関係性について検討していく。

表 1　「学級づくり」型学級経営の三領域の内容

領域	内容
領域 1	・一貫して「敬意ある/毅然とした」態度で指導する領域 ・児童生徒個々への敬意：人権を侵害する行為は許されない
領域 2	・授業のシステムづくり：授業のための約束事の日常化 ・学級管理：出席，環境整備，配布物等の管理 ・学級・学校生活の設計
領域 3	・学級・学校における問題解決と文化創造 ・コミュニケーションの経営（話し合い活動の促進と活性化） ・児童生徒の自発的，自治的活動の促進

＜学級経営＞

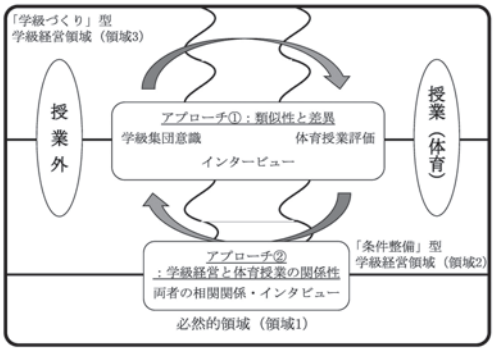

図 1　本研究における理論的枠組みと分析のアプローチの関係性

4. 研究の方法

4.1. 調査対象と調査時期

調査対象は，国立大学法人 X 大学附属 Y 小学校における初任の教員 A（以下，初任教員 A とする）である。また，初任教員 A は 3 年 1 組の学級担任であったため，その学級の児童 32 名を調査対象とした。調査は，平成 27 年 5 月～12 月の間に行った。その中で，5 月・7 月・10 月・12 月の 4 回にわたって調査を実施した。調査を進めるにあたって欠席等でデータの欠損が生じた児童 3 名を除いた児童 29 名を最終的な調査対象とした。

本研究の調査対象である初任教員 A は，X 大学において中学校及び高等学校の保健体育の専修免許を取得している。また，X 大学大学院在籍時において小学校教諭第 1 種免許も取得している。初任教員 A は，X 大学大学院を修了後，Z 市立の中学校における保健体育科の非常勤講師を 1 年間経験している。さらに初任教員 A は，専門競技がバスケットボールであり，高校・大学では全国大会に出場した経験がある。

4.2. 調査内容と調査方法

初任教員 A の体育授業と学級経営の実態を把握

するために，初任教員 A とその児童に対して，以下の調査を実施した。

（1）児童に対する調査について

児童に対しては，以下の 2 点のアンケート調査を実施した。それぞれのアンケート調査は，5 月・7 月・10 月・12 月の全 4 回にわたって調査を実施した。

（a）体育授業についての調査

体育授業の実態を把握するために，体育授業についての調査票（高田ら，2003）を用いて調査を行った。質問項目の内容は，「楽しさ」（情意目標），「学び方」（認識目標），「技能」（運動目標），「態度」（社会的行動目標）の 4 次元各 5 項目で合計 20 項目から構成されている。なお，質問項目への回答は，「○」「△」「×」の 3 件法とした。

（b）学級経営についての調査

学級経営の実態を把握するために，日野ら（2000）が開発した学級集団意識の調査票を用いて調査を行った。質問項目の内容は，「雰囲気」，「活動性」，「学習意欲」，「人間関係」の 4 次元各 4 項目で合計 16 項目から構成されている。なお，質問項目への回答は，「○」「△」「×」の 3 件法とした。

（2）初任教員 A に対する調査について

体育授業と学級経営の実態について調査するために，初任教員 A に対してインタビュー調査を行った。インタビュー調査は，全 4 回の調査のうち，5 月（事前）と 12 月（事後）の調査時に行った。事前のインタービュー調査では，①自身の体育授業について，②自身の学級経営について，③体育授業と学級経営の関係性についての 3 つの柱で「半構造化インタビュー」（メリアム，2004）を用いて実施した。また，事後のインタビュー調査では，3 回目までの調査結果を提示しながら，体育授業と学級経営の関係性について「非構造化インタビュー」（メリアム，2004）を実施した。なお，インタビュー調査の内容は全て IC レコーダーに記録した。

4.3. 分析の手続き

まず，児童に対するアンケート調査について述べる。体育授業評価と学級集団意識の調査はそれぞれの項目に「○」「△」「×」の 3 件法で回答を得た。そして，「○」に 3 点，「△」に 2 点，「×」に 1 点として計算した。その後すべての次元の項目の平均値を求め，次元ごとの平均値を求めた。さらに，体育授業評価と学級集団意識のそれぞれ 4 次元の平均値の相関係数（ピアソンの積率相関係数）を算出した。相関係数の算出に際しては，SPSS Statistics 17.0 を用いた。

次に，インタビュー調査について述べる。IC レコーダーに記録した音声データの内容をすべて文字化した。なお，文字化したデータはアンケート調査の結果を解釈するための補助資料として用いた。

5. 結果

5.1. 体育授業評価に関する調査の結果

図 2 は体育授業評価の各次元における平均値の年間推移を示している。年間を通して 4 次元の中で「態度」次元が最も高い値を示している。4 回の調査において各次元の平均値が増減しているが，各次元において有意差は認められなかった。

5.2. 学級集団意識の調査の結果について

図 3 は，学級集団意識の各次元における平均値の年間推移を示している。その中で「人間関係」次元については，同様の調査を行った日野ら（2000）の先行研究と比較しても，数値が低い結果となった。学級集団意識においても，4 回の調査で各次元の平均値が増減しているが，それぞれの次元において有意差は認められなかった。

5.3. 体育授業と学級経営の関係性について

表 2 から表 5 は，第 1 回から第 4 回の体育授業評価と学級集団意識の相関関係を示している。

まず，表 2 を見てみると，第 1 回（5 月）の調査では，全 16 項目中の 12 項目で相関関係が見られた。中でも，学級集団意識の「活動性」（学級内での多様なイベントや活動を企画・運営したり，実行したりすることなど）と体育授業評価の関係が深いことが示された。特に，体育授業評価の「楽しさ」（情意目標），「学び方」（思考・判断），そして，「態度」（社会的行動目標）の次元において，高い相関値を示している。このことから，5 月の時点においては，初任教員 A の行う体育授業と学級集団意識の関係は全体的には浅い一方で，学級内での「活動性」と体育授業に関係があることが分かった。

次に，表 3 に着目すると，第 2 回（7 月）の調査時には 5 項目で相関関係が見られた。中でも，学級集団意識の「学習意欲」（学業に対する興味，関心，成功感，努力への意志，学習への態度など）と体育授業評価に強い関係性が示された。また，

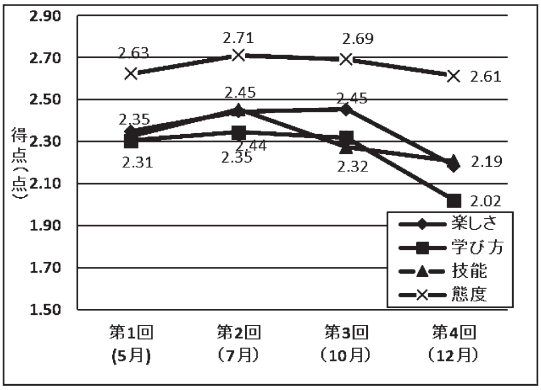

図２　体育授業評価の各次元における
平均値の年間推移

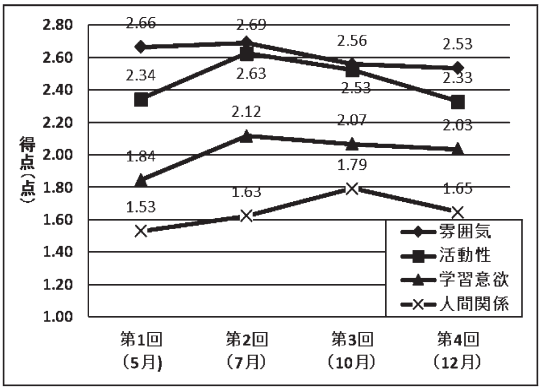

図３　学級集団意識の各次元における
平均値の年間推移

表２　第１回（5 月）調査時の体育授業評価と
学級集団意識との相関関係

学級／体育	雰囲気	学習意欲	活動性	人間関係
楽しさ	.396*	.391*	.696**	.400*
学び方	.389*	.421*	.676**	.503**
技能	.231	.326	.671**	.250
態度	.189	.414*	.483**	.379*

（＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01）

表３　第２回（7 月）調査時の体育授業評価と
学級集団意識との相関関係

学級／体育	雰囲気	学習意欲	活動性	人間関係
楽しさ	.331	.630**	.452*	.401*
学び方	.150	.411*	.362	.256
技能	.358	.544**	.284	.193
態度	.247	.284	.037	.151

（＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01）

表４　第３回（10 月）調査時の体育授業評価と
学級集団意識との相関関係

学級／体育	雰囲気	学習意欲	活動性	人間関係
楽しさ	.514**	.252	.081	.454*
学び方	.488**	.413*	.085	.205
技能	.379*	.348	.095	.347
態度	.438*	.197	.129	.120

（＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01）

表５　第４回（12 月）調査時の体育授業評価と
学級集団意識との相関関係

学級／体育	雰囲気	学習意欲	活動性	人間関係
楽しさ	.514**	.252	.081	.454*
学び方	.488**	.413*	.085	.205
技能	.379*	.348	.095	.347
態度	.438*	.197	.129	.120

（＊：p＜0.05，＊＊：p＜0.01）

表 4 の第 3 回（10 月）の調査時には，6 項目で正の相関関係があり，学級集団意識の「雰囲気」（学級の居心地の良さ，学級への肯定的な態度や満足度など）と体育授業評価に強い相関があった。

そして，表 5 の第 4 回（12 月）の調査時には，全 16 項目中の 11 項目で相関が見られた。特に，学級集団意識の「活動性」が体育授業評価と高い相関を示していた。また，体育授業評価の「楽しさ」（情意目標），「学び方」（思考・判断），そして，「技能」（運動目標）の次元において，学級集団意識と高い相関が示された。

6. 考察

6.1.「条件整備」型学級経営観と体育授業

「条件整備」型学級経営の概念においては，児童の学習が円滑に行われるための環境を整備することを狙いとする学級経営観である。つまり，教室の環境を整備したり学習規律を整えたりすることが重要となってくる。

そこで，体育授業評価の結果を見てみると，4 次元の中で「態度」の得点が高い値で推移しているのが分かる。「態度」次元の項目の中には，「体育では，先生の話をきちんと聞いています」や「体育では，クラスやグループの約束ごとを守ります」など，体育授業における学習規律に関係するような項目が設定されている。つまり，初任教員 A の体育授業は学習規律が保たれている授業であったと言える。その一方で，体育授業評価と学級集団意識の相関関係を見てみると，1 回目の調査では「学習意欲」，「活動性」，「人間関係」と「態度」の 3 つの次元に相関関係が見られた。しかも，それ以降の調査では 1 つの次元に相関関係が留まっている，もしくは相関関係が見られない状態であった。初任教員 A は，事前インタビューの中で「本当に去年の先生方が，学習規律とかを本当にちゃんとやってくれてたんで，その辺に関しては，私はまあ，あれなんですけど，そんなに困ってないかなというところです」と発言している。このことからも，5 月時点においては昨年度までに積み上げてきた成果が学級集団意識にも影響を及ぼしていることが推察される。

他方で，事前インタビューの中で 3 年生の目標として「かっこいい 3 年生になる」ということを掲げていると述べている。幼小中一貫校の Y 小学校では「ペアさん」という活動をしており，4 年生になると幼稚園児と「ペアさん」になり一緒に活動することになる。また，5 年生は 1 年生と 6 年生は 2 年生と「ペアさん」になるため，3 年生だけは「ペアさん」がいない状態になっている。そのため，来年度に向けて下の学年の見本となるような「かっこいい 3 年生になる」ことを目標にしている。具体的に「かっこいい 3 年生」とは，挨拶ができることや姿勢がいいこと，返事がいいこと，廊下を走らないこと，廊下の右側を歩くことなどが挙げられてる。

白松（2017）は，このような学校における約束ごとやきまりを「きまりごと」と表現しており，これらの「きまりごと」を調整し，浸透させ，児童生徒が生活しやすくするための指導を行うのが学級経営の計画的領域（「条件整備」型学級経営領域）であると述べている。また，この際に「きまりごと」に関して合意・改善のプロセスが重要であると指摘している。Y 小学校では，総合的な学習の時間を使って先述した「ペアさん」の活動を行っている。3 年生においては，その時間を使って「かっこいい 3 年生」とはどういう姿なのか，そのような姿になるためにはどうすればいいのかといった合意形成のプロセスを授業の中で行っている。こういった活動が学校全体の「きまりごと」を守るという態度や雰囲気を醸成し，初任教員 A の学級経営にも良い影響を及ぼしていることが推察される。

一般的に初任者は，学級経営に困難さを感じると言われている（安藤，2013；高平ら，2014）。ここでの学級経営が意味するのは，「条件整備」型学級経営としての狭義の学級経営であると考えられる。そのため，初任教員 A がインタビューの中で述べているように，こういった面での学級経営については「そんなに困っていない」状態であったと考えられる。しかし，初任教員 A は 1 年間を通して体育授業における学習規律は保てたものの，5 月以降はそういった態度面を学級集団意識につなげることができていないことが示唆された。

6.2.「学級づくり」型学級経営観と体育授業

「学級づくり」型学級経営の概念においては，学級・学校における問題解決と文化創造，そして話し合い活動の促進と活性化をしながら，児童生徒の自発的，かつ自治的活動の促進をねらい人間関係を円滑にしていくことを狙っている（白松，2014）。

しかし，本研究の学級集団意識の結果を見てみると，「人間関係」次元の値が 1 年間を通して低い水準にあることが分かる。日野ら（2000）の先

行研究においても4次元の中で「人間関係」が最も低い水準になる傾向が見られるが，その値と比較しても本研究の方が低値を示している。特に，「あなたのクラスは，よくまとまっていると思いますか」や「あなたのクラスには，自分勝手なことをする人が多いですか」,「あなたのクラスには，けんかやもめごとが多いと思いますか」の3つの項目が日野ら（2000）の研究と比べて低い値を示している。一方で，本研究において，「雰囲気」の次元は他の次元と比べて高い値を示している。この「雰囲気」の次元には「あなたのクラスは明るく楽しいクラスだと思いますか」や「あなたのクラスの友だちといっしょに遊んだり，話したりするのが好きですか」というような項目が設定されている。

これらのことから，初任教員Aの担任する学級は「自分と親しい友だちとは良好な関係を築けているが，その他の友だちとの関係はうまくいっていない」という特徴を素描することができよう。もちろん，このような特徴は何も初任教員Aの学級だけに見られるものではないだろう。すなわち，自分と異なる価値観の他者に対して，どのように人間関係を構築していくかということが広義の学級経営には求められる。そのような点から考えれば，教室の中で行われる他の教科の授業とは異なり，グラウンドや体育館などの広大な空間で身体活動を伴う学習を行う体育授業では，人間関係を構築するための有効な教科であると考えられる。このことについて，飯塚ら（2005）は，人間関係を豊かにするスキルについて理解を深め，普段は関係性が浅い友だちの良さを発見したり，関わろうとする力を育てる点においてスポーツは最適であることを指摘している。実際に初任教員Aも事後インタビューの中で，「けんかをしない，小さな平和っていうのは，相手の嫌なことをしないとか，けんかをしないっていうことって子供らは言うんですけど，でも，実際のところ，場面に出くわすと，自分の想いのままに話してみたりとかっていうのは，体育の時間に一番表れやすい，表れるところなので，そこで，まあ，学級経営というか，学級づくりと言うんですかね，っていうのは，一番できるんじゃないの，という話を（同僚の先生に）されて，まあ，そうだよなという思い（括弧内筆者が加筆）」が芽生えてきたと述べている。

日野ら（2000）によれば，体育授業と学級集団意識の関係を個人単位で見た場合に，単元前後で体育授業の評価が向上した児童の群は，学級集団意識も有意に向上する傾向が認められている。つまり，児童が評価するいい体育授業を行うことができれば，それによって学級集団意識が変容する可能性を示している。したがって，体育授業を行う上で「学級づくり」を意図した授業設計を行うことで，体育授業を通した学級経営が可能になってくると考えられる。

6.3. 体育授業は学級経営にどのような影響を及ぼしていたのか：本事例から見えるもの

これまで，体育授業と学級経営の関係について，体育授業評価と学級集団意識の結果から初任教員Aの特徴について述べてきた。その特徴として，体育授業評価における「態度」次元の得点が高く学習規律は保たれているものの，学級集団意識における「人間関係」次元の得点が低く学級内における良好な人間関係の構築に苦悩している様子が示唆された。このことに関して，初任教員Aも事前インタビューの中で「他の先生に聞いたら，『誉め誉め作戦』でしょっみたいな。どうしても，気になる子に『こういう風にしないといけないじゃん』って声をかけがちなんですけど，そういう子らって，大体，私が怒っているとか，そういう風に思いがちなんですけど，そういう時はいい子を誉めるようにしたら，多分，普段，声をかけていない子も，かけれる気がするっていうのを習ったので，そういうようにやっているけど，そしたら，次にいいなと思う子が限られすぎて，（中略）難しいです」と述べており，児童を褒めることの重要性を感じながらもその難しさに悩んでいる現状が窺える。

もちろん，子どものモチベーションを向上させることは効果的な学級経営につながることは当然であろう（Pemela *et al.*，2005）。しかも，教員の指導スタイルが管理的・一方的・専制的である時，教員と児童・生徒の間の信頼関係が希薄になることから，子どもたちの間に打ち解けた雰囲気がなくなり学級意識が育たないことも指摘されている（谷ら，2015）。しかし，初めて学級経営を担当する初任教員Aにとって，学級経営を通して人間関係を構築していく有益な方略を常に持ち合わせている訳ではない。そのため，態度や規律に対する指導に力点を置きすぎたために，先で述べたような特徴が浮き彫りになったと推察することができる。つまり，「管理型の学級は人間関係の形成が広がりにくい」（河村，2010）ため，そのような影響が作用したと考えられる。

したがって，叱る際には，子どもの存在を尊重し，子どもが自分の行動を修正しようと考える精神的余裕を持たすように指導することが大切である（河村，2005）。このことは，「学級づくり」型学級経営の三領域の必然的領域に関わる部分であると考えられる。

次に，体育授業評価と学級集団意識の相関関係を見てみると，5 月の調査においては 16 項目中 12 項目に相関関係がみられた。これは初任教員 A 自身も述べているように，前年度からの積み重ねによる成果が反映している結果であると考えられる。その証拠に，7 月と 10 月の調査ではそれぞれ 4 項目と 6 項目にしか相関関係が見られなかった。しかし，12 月の調査では 11 項目に相関関係が見られ，5 月の調査と同等の結果となっている。これは，初任教員 A が 1 年間を通して学習規律を整え，悩みながらも児童を褒めるような肯定的な雰囲気作りを心がけながら体育授業や学級経営を行ってきた成果であると考えられる。つまり，初任教員 A は体育授業や学級経営において，試行錯誤しながら領域 1 や領域 2 の部分を意識して指導を行ってきた成果であろう。

一方で，本研究の結果において体育授業評価と学級集団意識の間に正の相関が見られたが，日野ら（2000）と比べるとその関係性は低いことが分かった。日野ら（2000）の研究では，教員の教職歴を限定せずに小学校の 49 学級を対象に調査を実施している。そのため，教職歴によってその関係性に差異があるかどうかは明らかになっていなかった。そこで今回初任教員 A を対象に調査を実施した結果，安定した相関関係は示されなかった。このことから，初任者では体育授業と学級経営の関係があまり見られない可能性が示唆された。

初任教員 A は「実際のところ，どんな学級にしたいとか，多分今年からなかったんですよね，っていうか，分からなかったんですよね。分からなかったからだし，今もどんなクラスがいいのか，全然，分からないし（中略）でもまあ，今の自分のクラスに満足している訳じゃなくて，何か，目指すべき学級っていうのはないから」と述べており，「かっこいい 3 年生」という目標はあるものの「きまりごと」以外の学級像・児童像が明確ではなかったことが推察される。

広山（2009）は，自分が担任を持つ子どもに対して，具体的な子ども像を明確にたくさん持つことで，日々の指導ができるとしている。換言すると，目の前の子どもたちを指導する際に，子どもたちをどのような姿に変えていくのか具体的な姿や場面をたくさん持っておく必要があるということである。そういった目指すべき具体的な姿がなかったため，教科指導である体育授業と生徒指導・進路指導などを含む学級経営との関係性が低くなったのではないだろうか。そのように考えれば，学級担任がほとんどの授業を行う小学校において，一貫した指導のスタンスを確立することが円滑に学級経営を行う上で重要となってくるであろう。

7. 摘要と今後の課題

本研究の目的は，初任の小学校教員における体育授業と学級経営の関係性について，事例的に明らかにすることであった。その結果，以下の 2 点が明らかとなった。

（1）初任教員 A の特徴として，体育授業評価における「態度」次元の得点が高く学習規律は保持されていた．しかし，学級集団意識における「人間関係」次元の得点が低値を示し，学級内における良好な人間関係の構築に苦悩されている様子が窺えた。

（2）体育授業評価と学級集団意識との相関関係の結果から，初任教員 A の体育授業と学級経営に強い関係性は見られなかった。その要因として，初任教員 A の語りから，初任教員 A が目指す学級像が明確ではなかったことが示唆された。

そして，本研究の限界性についても述べておきたい。まず，本研究においては体育授業と学級経営の関係性について検討したが，体育授業を教科指導として捉えた場合，体育授業における特徴が体育特有のものなのか，それとも他教科にも共通するものなのかについて本研究では検討できなかった。そのため，今後は他教科についても学級経営との関係性を調査することで体育授業の特徴をさらに明らかにすることができると考えられる。また，本研究では学級経営を学校教育における教育活動全般として広義にとらえ，学級経営について学級集団意識を調査したが，学級集団意識のみで学級経営の内実のすべてを評価することができていないと思われる。そのため，学級経営についてより包括的な調査を実施し，その結果との関係性を検討することでより詳細な体育授業と学級経営の関係性を明らかにすることが可能であると考えられる。

最後に，本研究は初任教員 A を事例として研究を行った。あくまでも事例的な研究であるため，

本研究の結果から，すべての小学校初任教員の体育授業と学級経営の関係性を網羅的に捉えた研究となっている訳ではない。そのため，今後はさらに多くの事例研究を積み重ねることで小学校の初任教員の特徴を明らかにすることができるであろう。

引用・参考文献

1. 安藤きよみ・中島望・鄭英祚・中嶋和夫（2013）小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究．川崎医療福祉学会誌，22：148-157.
2. Bagly, W. C.（1907）Classroom management：its principles and technique.New York：Macmillan.
3. Bandura, A.（1969）Social-Learning Theory of Identificatory Processes. In D.A.Goslin（Ed.）, Handbook of Socialization Theory and Research, Chicago, IL：Rand McNally & Company.pp.213-262.
4. Brophy, J.（2006）History of Research on Classroom Management. In C.Evertson & C.Weinstein（Ed.）, Handbook of Classroom Management. New Jersey：Lawrence Erlbaum Associates, Inc，pp.17-46.
5. Gallant, A. & Riley, P.（2014）Early career teacher attrition：new thoughts on an intractable problem. Teacher Development, 18（4）：562-580.
6. 学校教育研究所（2004）「学級経営の時代的課題」学校教育研究所，学校図書.
7. 日野克博・髙橋健夫・八代勉・吉野聡・藤井喜一（2000）小学校における子供の体育授業評価と学級集団意識との関係．体育学研究，45：599-610.
8. 広山隆行（2009）「局面指導」が学級を変える－とっさの指導の心構えと上達法－．日本標準：東京.
9. 細越淳二・鋤柄純忠（2002）子どもの体育授業態度評価と学級に対する意識との関係．茨城キリスト教大学紀要社会・自然科学，35：99-109.
10. 細越淳二（2004）小学校における体育授業と学級経営の関係についての検討．日本体育学会大会号，55：596.
11. 飯塚宏一・石渡洋美・宮澤礼子（2005）豊かな心と体づくりを目指した保健体育指導：人とのかかわり方を通して．宇都宮大学附属中学校研究論集，53：88-93.
12. 岩田昌太郎（2014）中高の保健体育教師の意識調査から見えてきた体育授業への問題・関心の現実．体育科教育，62（7）：38-41.
13. 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟（2010）体育授業の悩み事に関する調査研究（その 1）－教職経験に伴う悩み事の差異を中心として－．学校教育実践学研究，16：85-93.
14. 加登本仁・松田泰定・木原成一郎・岩田昌太郎・徳永隆治・林俊雄・村井潤・嘉数健悟（2011）体育授業の悩み事に関する調査研究（その 2）－悩み事の解決方法を中心として－．学校教育実践学研究，17：169-174.
15. 河村茂雄（2005）若い教師の悩みに答える本．学陽書房：東京.
16. 河村茂雄（2010）日本の学級集団と学級経営－集団の教育力を生かす学校システムの原理と展望－．図書文化社：東京.
17. 木原俊行（2004）授業研究と教師の成長．日本文教出版：大阪.
18. Lewis, R.（2001）Classroom discipline and student responsibility:The student's view. Teaching and Teacher Education, 17（3）：307-319.
19. Marso, R. N., & Pigge, F. L.（1987）Differences between self-perceived job expectations and job realities of beginning teachers. Journal of Teacher Education, 31（6）：53-56.
20. 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説総則編.
21. 文部科学省（2010）公立学校教職員の人事行政の状況調査について．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1318889.htm，（参照日 2017 年 11 月 5 日）.
22. 文部科学省（2012）教職生活全体を通じた資質能力の総合的な向上方策について（審議のまとめ）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm，（参照日 2017 年 11 月 5 日）.
23. 文部科学省（2016）平成 27 年度公立学校教職員の人事行政状況調査について．http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/jinji/1380718.htm，（参照日 2017 年 6 月 13 日）.
24. 中田正弘（2009）小学校教師が求める資質能

力に関する考察－3 世代教師の意識の共通と差異をもとに－．帝京大学文学部教育学科紀要，34：21-29.
25. Odell, S. J.（1986）Induction support of new teachers:A functional approach.Journal of Teacher Education, 1：26-29.
26. Pamela,L.,Linda,D.H.,Hanife,A.,with Cris,G., Evelyn,J.G.,Kathy,R.（2005）Classroom Management.In:Linda,D.H.and John,B.（Eds.）Preparing Teachers for a Changing World:What Teachers Should Learn and Be Able to Do. Jossey-Bass,pp.327-357.
27. Paul Montuoro,Ramon Lewis（2015）Student perceptions of misbehaviour and classroom management.InE.Emmer&E.Sabornie（Ed.），Handbook of Classroom Management（2nd ed.） New York:Routledgepp,344-362.
28. S.B.メリアム（2004）質的調査法入門－教育における調査法とケーススタディー．ミネルヴァ書房：京都.
29. 白松賢（2014）授業/学級づくりに関する教育方法学的研究（1）教育課程にみる「学級経営」概念の日本的特色に着目して愛媛大学教育学部紀要，61：71-78.
30. 白松賢（2017）学級経営の教科書．東洋館出版社：東京.
31. 秦泉寺尚・飯野透・太田黒保宏・山本栄二（1993）宮崎県における体育・運動嫌いの実態と嫌いにさせる要因に関する研究．宮崎大学教育学部紀要，74：23-43.
32. 高田俊也・岡澤祥訓・高橋健夫（2003）体育授業を診断的・総括的に評価する．高橋健夫（編）体育授業を観察評価する－授業改善のためのオーセンティック・アセスメント－．明和出版：東京，pp.8-11.
33. 高橋健夫（1996）危機に立つ学校体育．学校体育，49（2）：10-13.
34. 高平小百合・太田拓紀・佐久間裕之・若月芳浩・野口穂高（2014）小学校教員にとって何が困難か？－職務上の困難についての新任時と現在の分析－．玉川大学教育学部紀要，5：103-125.
35. 谷勉・遠藤善和・伊田勝憲・石田純夫・原田唯司（2015）学級経営支援における「学級風土質問紙」の活用：理想の学級集団の状態像を類型化する試み．静岡大学教育実践総合センター紀要，23：185-194.
36. 中央教育審議会（2017）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm,（参照日 2017 年 11 月 5 日）.
37. 土田学（2015）人間関係づくりを柱とした学級経営の在り方．山形大学大学院教育実践研究科年報，6：176-183.
38. 友添秀則（2009）体育の人間形成論．大修館書店.
39. 歌川好夫（1998）「学級経営と体育」を考える．体育科教育，46（6）：29-31.
40. 八代勉（1998）学級経営をテーマに据えた授業研究の成果．体育科教育，46（6）：23-25.